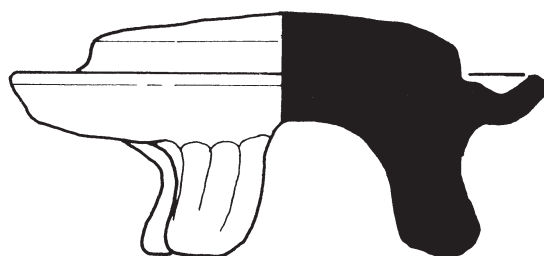


鈴鹿市郡山町

# 西高山遺跡発掘調査概要



三足円面硯 1/1

1976.6

鈴鹿市遺跡調査会

## I 調査経過

昭和50年、6月よりA区（第1期工事分357,000㎡）、について、郡山遺跡と呼称し、試掘調査を実施した。調査結果は、概要報告（Ⅰ）、（Ⅱ）に記したように、他の遺跡では、類例を見ない程の多量の須恵器を保有する、古墳時代後期の大集落址であることが判明した。

昭和50年、11月、調査指導委員会を開き、試掘結果を報告するとともに、保存を要する区域についても協議し、その内容については、三交不動産株式会社に通知した。

昭和51年、1月、業者もまじえ、今年、最初の指導委員会を開き、業者側からの計画等を聞いた。遺跡調査会として、その計画内容について、決って、納得のいくものでなかったが、問題部分について、後日、協議することにし、一応、試掘調査費用の残りをを用いて、周辺遺跡から、調査に着手することになった。

## Ⅱ 位置と地形

昭和51年、1月から着手した、西高山遺跡はA区の最西端、中央部にあり、西側部分を除き、幅40m～45mの小支谷により囲まれ、南東方向に、ゆるやかに傾斜する小舌状台地である。当遺跡は、試掘調査時、B地区と呼び、試掘坑約100箇所を設定してある。遺構、遺物が確認された箇所は、B地区、中央部より東側で、本発掘の対象をこの部分（5,000㎡）に限った。発掘中、遺構の広がりの問題で、800㎡拡張し、結局、5,800㎡になった。

### Ⅲ 調査方法

除草の後、ブルドーザを導入し、約 15cm～20cm 表土除去を行なった。更に、試掘坑の地区杭を延長、見透しをたてて、4m 四方の地区割を設定、それを、発掘区の東より、東西にアルファベット（1～5）、南北に（A～E）の組み合わせで表わし、西側部分より調査にかかった。（付図 3）

### Ⅳ 遺 構

遺構、遺物の濃密な箇所は、C 3 から C 4 地区であった。遺構には、堅穴住居址（16 基）、掘立柱建物址（32 棟）の他、多数の土壙が見つかった。

#### (1) 堅穴住居址

古墳時代後期から、飛鳥時代に属するものである。住居址のほとんどに、周溝を持つが、四隅の柱穴が不明瞭であるものが多い。炉は、住居址の東辺、北辺に多い様である。また、住居址に接続して、排水溝と考えられる細溝が、谷に向かって延びるものがある。河芸の千里ヶ丘遺跡、員弁の新野遺跡など、北勢地域から、報告されている。時代が、新しくなるにつれ、住居址の規模が、減少するという、一般的傾向の中で、当遺跡は、付表 1、②のごとく、分類できた。

#### 堅穴住居址

S B	規模 (m)	面積 (㎡)	深さ (cm)	南北軸	炉位置	備考	周溝
40	3.5 × 3.7	13.0	11	N 47° E	—		○
41	3.7 × 3.7	13.7	17	N 47° E	北		○
42	5.7 × 5.5	31.3	—	N 90° E	東	(平地式住居址)	○
43	3.8 × 4.8	18.2	15	N 43° E	—		○
44	4.2 × 4.2	17.1	19	N 22° W	中央		○
45	5.0 × 5.0	25.0	21	N 17° E	北	鉄滓	○
46	5.0 × 4.5	22.5	23	N 90° E	—		○
47	5.7 × 5.6	32.0	17	N 90° E	東		○
48	4.6 × 4.6	21.1	19	N 17° E	北		○
49	4.5 × 4.7	21.1	33	N 32° W	東	鉄滓 長頸壺	×
50	4.8 × 4.8	23.6	19	N 20° E	北		○
51	6.5 × 6.5	42.0	22	—	—	奈良時代の土壙と複合する	×
52	5.8 × 5.6	32.4	16	N 57° E	西	台付椀	○
53	5.0 × —	—	—	—	東	(平地式住居址)	○
54	4.0 × —	—	—	—	—	( " ), 硯	○
55	5.0 × 4.8	24.0	19	N 51° E	北		○

## (2) 掘立柱建物址

古墳時代のものと、奈良時代のものがある。30棟以上の建物址が明らかにされているが、棟方向は、東西方向から、やや北に振ったものと、南北方向から、やや東に振ったものが中心である。

建物は、3間×2間の身舎のみのものが多く、束柱を持つものも数棟ある。梁の柱間は桁と同様、もしくは、少し長いものが多い。梁は、3.5m～3.8m、桁は3.5m～5mの幅にまとまりがみられる。(付表1, ①)

建物址(SB22)は、3間×3間の建物で桁行、1.7m + 2.3m + 1.4mと中央の柱間が少し広い。

### 掘立柱建物址

S B	規模(間)	桁行(m)	梁行(m)	棟方向	面積(m <sup>2</sup> )	束柱
1	2×2	4.5	3.8	N 80°W	17.1	
2	3×2	5.4	3.6	N 90°W	19.4	
3	4×2	11.8	3.2	N 54°W	37.8	
4	4×2	6.4	4.3	N 21°E	27.5	○
5	4×2以上	6.1	—	N 45°W	—	
6	3×2	6.0	3.5	N 47°W	21	
7	2×2	3.6	3.0	N 72°W	10.8	
8	3×2	3.8	3.5	N 70°W	13.3	
9	2×2以上	—	3.0	N 48°W	—	
10	3×2	5.8	4.7	N 29°E	27.2	
11	2×2	3.2	2.7	N 69°W	8.6	
12	4×2	6.8	3.8	N 80°W	25.8	
13	5×3	8.2	5.0	N 25°W	41	
14	4×2	6.5	3.8	N 90°W	24.7	
15	4×2	6.0	3.8	N 24°E	22.8	○
16	2×2	4.0	3.6	N 38°E	14.4	
17	3×2	5.8	4.0	N 20°E	23.2	
18	5×2	9.7	3.7	N 24°E	35.9	
19	3×2	5.0	4.2	N 67°W	21.0	
20	4×2	7.0	3.5	N 73°W	24.5	
21	3×2	4.8	3.3	N 47°W	15.8	
22	3×3	5.2	3.7	N 86°W	19	
23	3×2	4.8	3.3	N 44°W	15.8	
24	4×2	6.7	3.5	N 62°W	23.4	
25	2×2	3.8	3.5	N 60°W	13.3	○
26	3×2	4.6	3.5	N 83°E	16.0	○
27	3×2	4.2	3.6	N 78°E	15.1	○
28	2×2	3.2	2.6	N 74°E	8.3	○
29	2×2以上	—	3.2	N 76°E	—	○
30	3×2	4.8	3.5	N 25°E	16.8	
31	3×2	4.4	3.6	N 17°E	15.8	
32	3×2	5.5	3.8	N 66°W	20.5	

### (3) 土 壙

古墳時代後期から、鎌倉時代までである。A<sub>1-2</sub>, B<sub>1-2</sub>, 地区の土壙は浅く、不正形のものが多い。遺物は、須恵器、土師器の細片で、異なる時期の遺物が混入し、時期は決め難い。C<sub>3-4</sub> 地区の土壙は、形態的に、前者より整っており、深いものがある。埋土中、炭化物を含み、暗褐色を呈するものが多い。

S K 22 より、奈良時代の須恵器（糸底）とともに、円面硯が出土している。

S K 25 より、滑石製の紡錘車、鉄滓が出土しているが、焼土は、見当らなかつた。

S K 28 より、須恵器の杯を中心に、約 15 個体以上出土したであろうか。土師器片、須恵器の甕片が若干出土したのみで、器種の組み合わせの面で興味深い。

### 土 壙

S K	規模 (m)	深さ (cm)	土器出土量		備考	時期
			須恵器	土師器		
1	3.0 × 2.0	20	1	1		古
2	2.0 × 2.0	35	1	—	山茶碗・山皿	鎌
	2.5 × 2.5	40	3	—		
3	5.5 × 3.0	25	2	1		奈
4	6.5 × 4.0	30	3	1/2	土 錘	古
5	3.0 × 2.0	15	3	1/2	山茶碗・山皿	鎌
6	3.0 × 2.0	15	2	1/2		奈
7	4.0 × 2.0	35	3	1/2	杯（糸底），すりばち	奈
8	2.5 × 2.0	15	3	1/2		古
9	3.0 × 2.0	30	2	1/2		古
10	5.0 × 4.0	20	4	1/2		古
11	3.8 × 3.4	30	1	1/2		古
12	3.4 × 3.0	40	3	1/2		奈
13	3.0 × 1.0	30	1	1/2		奈
14	3.5 × 2.5	30	3	1/2	瓦	奈
15	3.0 × 3.0	20	3	1/2		奈
16	5.0 × 1.5	40	5	1	土 錘	奈
17	3.5 × 3.0	30	5	1		古
18	4.0 × 1.5	20	3	1/2	高杯（二段二方透し）	古
19	3.0 × 1.5	35	2	1/2		古
20	3.5 × 3.0	30	3	1/2		古
21	4.0 × 2.5	20	6	1/2		古
22	2.5 × 2.0	31	4	1	硯，杯（糸底）	奈
23	4.8 × 2.4	30	3	1/2		古
24	2.4 × 2.0	30	2	1/2	鉄滓，紡錘車	奈
25	3.5 × 3.2	30	4	1/2		奈
26	1.5 × 1.3	22	2	1/2		奈
27	4.0 × 1.8	30	1	—		古
28	4.5 × 3.2	30	10	1		古
29	3.5 × —	20	3	1/2	杯（糸底）	奈

(註) 出土遺物 1 : 18 × 18 × 7cm の紙箱

## V 遺 物

出土遺物の殆んどは、土器類で、その他硯、土錘、紡錘車、砥石、土玉がある。

### (1) 土 器

古墳時代から、奈良時代の土器については、圧倒的に須恵器が多い。器種には、杯、甕、台付椀、短頸壺などがある。

古墳時代の杯は、器高、口径より、三態に分類できた。Aタイプのもものは、小形で、7世紀後半に、Bタイプのもものは、6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

このタイプのものには、天井部をヘラ削りするもの、不調整のものがある。量的に、これが一番多い。Cタイプは、大形のもので、A地区の試掘坑（No.8）、土壙より、出土したもので比較のために取りあげた。（付表1、③）

奈良時代の高台を持つ杯について、計測できるものが少ないが、底部、糸底のもの、ヘラ削りのものとは、器高で分類できる。ヘラ削りのものにも、二態あり、小形のもものは、黒っぽい色調である。（付表1、④）

### (2) その他の遺物

#### ○ 硯

硯、三点出土している。

器高3cm、細かく面取した、長さ、約1.5cmの足が付く特殊な小形硯（表紙図）と、脚部に、短冊状透孔を多数配したもの、五孔配したものと円面硯二種ある。三ツ足の硯と、円面硯一つは、未使用で、上面は、ザラザラしている。

#### ○ 土 錘

球状のもの、細長い棒状のもので、両端に小孔を持つもの、幅3.5cm、長さ7cmの円柱状のもの三態ある。

#### ○ 土 玉

球状の土錘を、小さくした感じのものである。約8～9mmの大きさで、糸が通るような、細い小孔があいている。祭祀、に用いられたものであろう。同じよう

な性格として伊奈富遺跡の古墳時代の住居址から、白玉が見付かっている。

### 出土箇所別実測土器対照表

土器番号	出土箇所	器種	特 徴
1	S K 10	蓋	天井部荒いヘラ削り、内面手ナデ。
2	C 3 - 14	〃	〃
3	S K 10	杯	底部は荒いヘラ削り、内面手ナデ。
4	S K 10	〃	〃
5	S K 19	蓋	天井部不調整、内面手ナデ。
6	S B 48	〃	〃
7	C 4 - 14	杯	底部雑な切り離し、内面手ナデ。
8	S K 19	〃	〃
9	S K 21	〃	深手の杯。底部と口縁部との間に沈線底部ヘラ削り。
10	S B 52	台付椀	椀部の底部、ヘラ削り。口縁部に窯印ある。
11	S K 7	杯	短かい高台が付く。底面はヘラ削り。
12	C 4 - 19 柱穴	〃	つまみ上げたような高台を持つ。底部は糸底。
13	S K 7	〃	ゆるやかな曲線を描く体部に短かい高台が付く。底部は糸底である。
14	S K 13	〃	器高の割に口径が大きいもの。底部はヘラ削り。
15	〃	〃	底部はヘラ切り不調整。
16	S K 7	〃	体部の 1/3 までヘラ削り調整。
17	S K 14	皿	底部はヘラ削り調整
18	〃	〃	体部の 1/2 までヘラ削り調整。
19	S B 49	鉢	体部に、カキ目と 2 条の沈線をほどこす。
20	S K 12	蓋	半球状のつまみが付く。天井部全体ヘラ削り。
21	〃	〃	天井部の全面をヘラ削り。
22	〃	〃	天井部の 1/2 程をヘラ削り。
23	S K 25	〃	天井部がわずかに段を成し、ほぼ全面ヘラ削り。
24	D - 4 地区表土	円面硯	短冊状の透しを多数配する。上面は凹む。
25	S K 22	〃	五つの透しを持つもの。未使用で上面は荒い。
26	S K 7	すりばち	丸い円板の側面にキザミを入れる
27	S B 49	長頸壺	頸部は 5cm と短かく、胴部にカキ目と二条の沈線をほどこす。

## VI 結 語

西高山遺跡は、古墳時代後期から、平安、鎌倉時代にわたる集落址であるが、その中心は、古墳時代後期から、奈良時代にあったようだ。特異な硯、丸瓦の細片が出土しているが公的建物址群とは考えられず、一般的な集落址であろう。

竪穴住居址からは、7世紀初頭から、後半にかけての、須恵器、土師器片が多数出土した。建物址の多くは、奈良時代に属すると考えられるが、たちあがりを持つ、杯片が出土した柱穴もあって、一部、竪穴住居址と建物址とが共存したとも考えられる。

ちなみに、竪穴住居址から、掘立柱建物址への移行は、四日市の貝野遺跡の例から、7世紀末から、8世紀とされている。

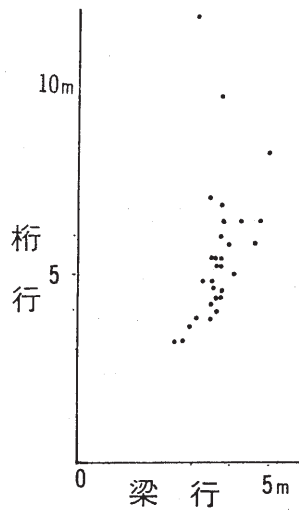


北勢地域において、掘立柱建物址、竪穴住居址の組み合わせを持った一般集落址の遺跡には、貝野遺跡、新野遺跡等があるが、同じ律令社会にあっても、たがいに異なった農村形態を示している。本遺跡も、二者とは異なった社会構造であったに違いない。

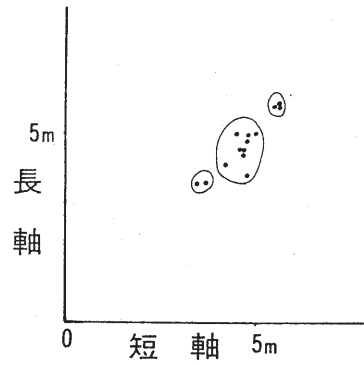
これから、明らかにされるだろう、遺物、遺構の分析と、周囲の歴史環境から、律令社会の形成から、完成への流れのなかで、地方における、農村形態がどの様に変容していったかと言う点、また、複雑な社会構造が解明されることだろう。

(文責、中森成行)

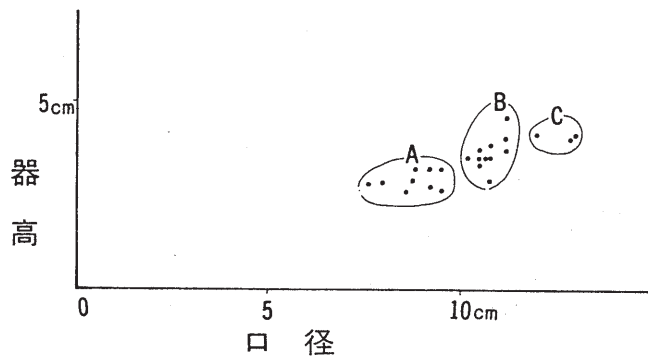




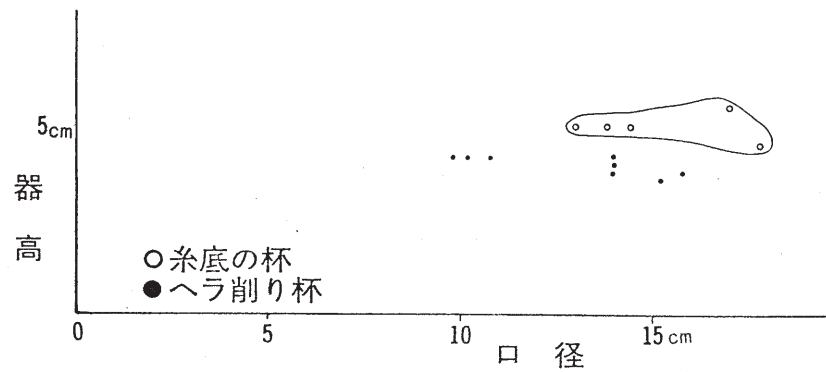
①掘立柱建物址の規模



②竪穴住居址の規模

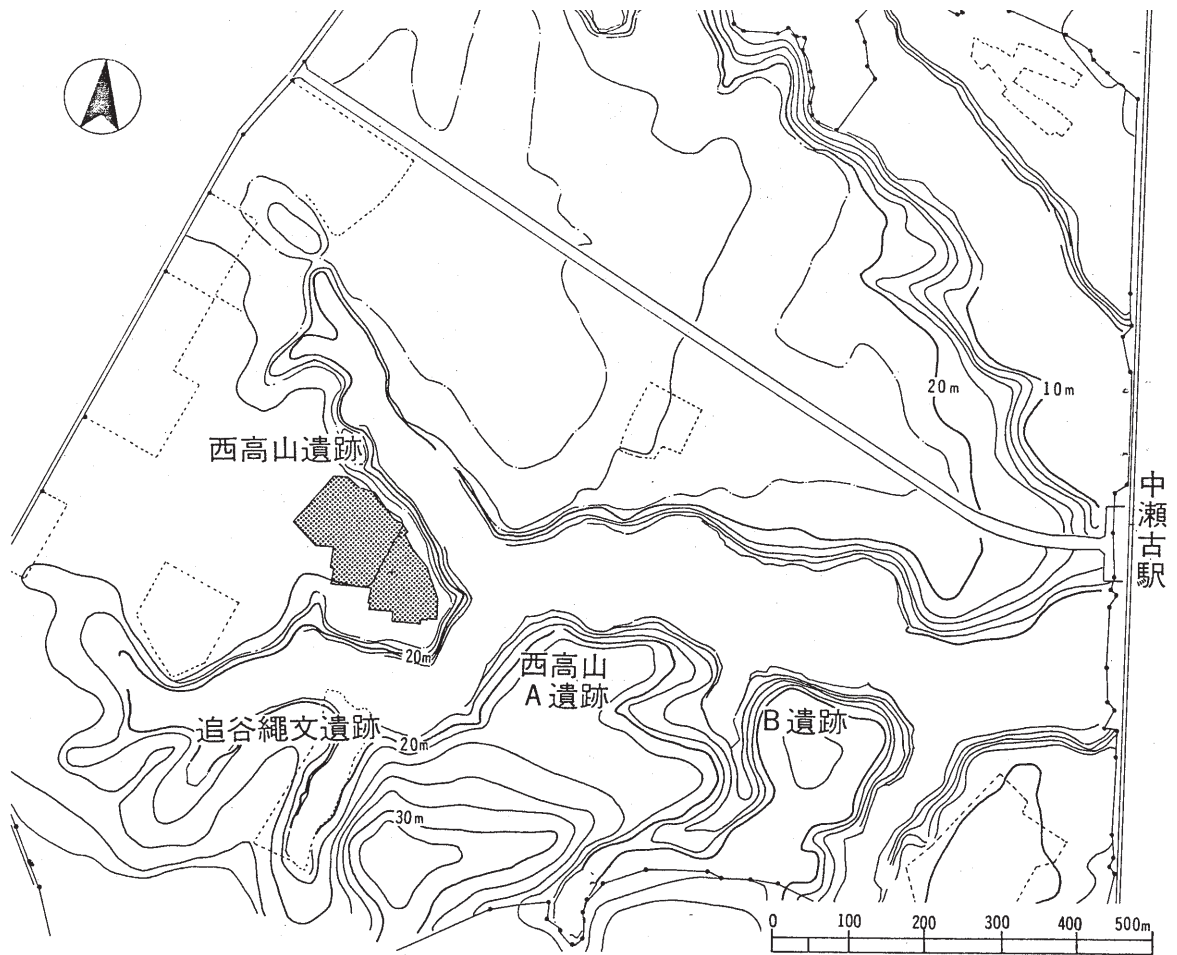


③古墳時代 杯の法量

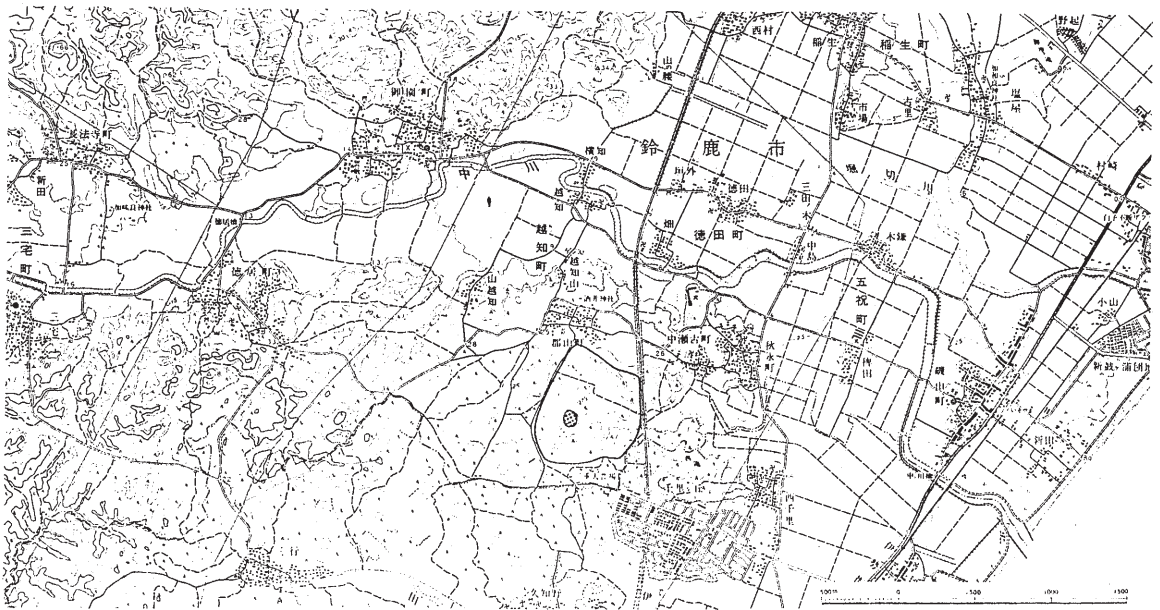


付表 1

④奈良時代 杯(身)の法量



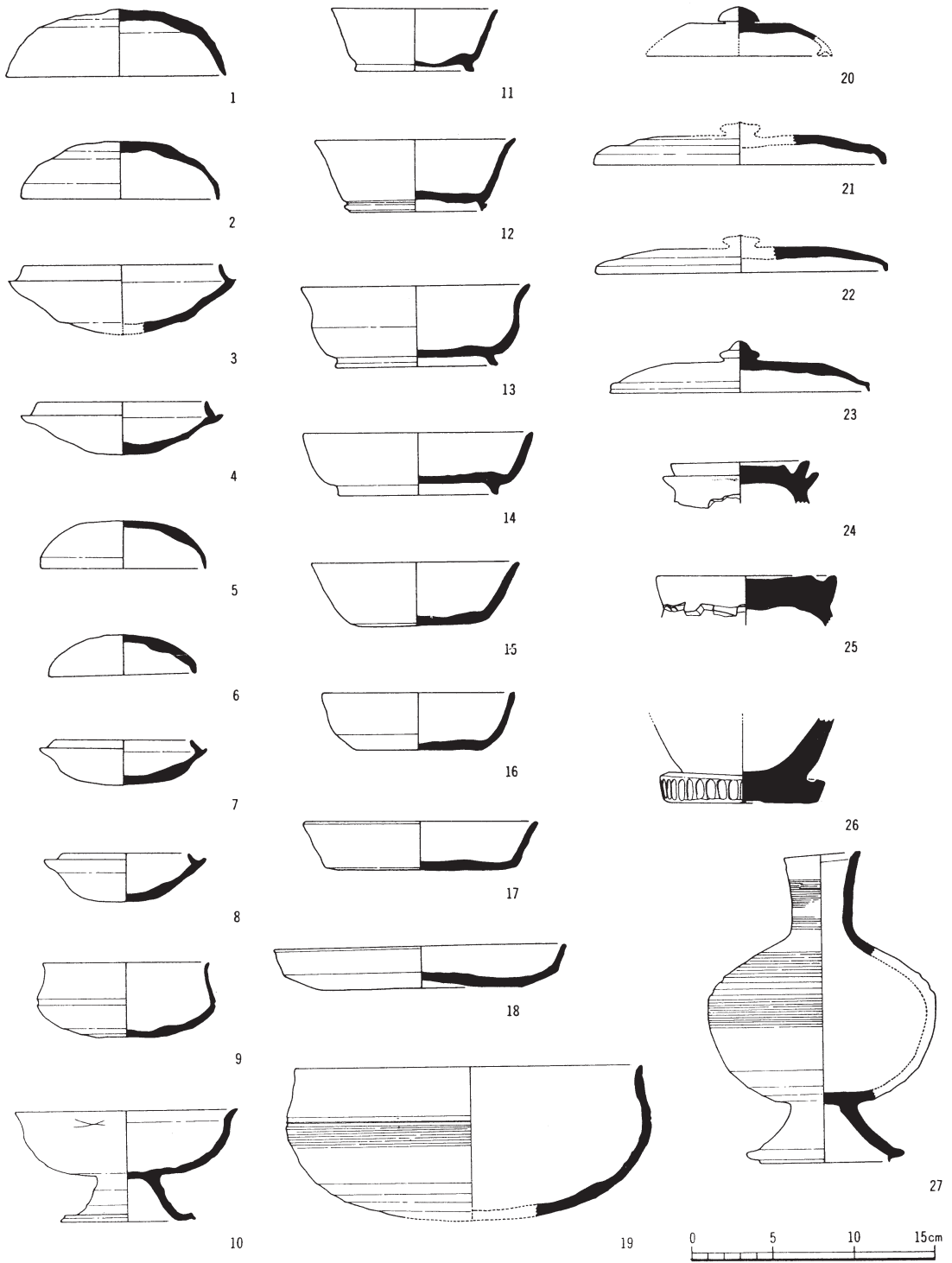
付図1. 西高山遺跡地形図 (1 : 5,000)



付図2. 西高山遺跡の位置 (国土地理院「白子」による 2.5万)



付図3. 西高山遺跡、遺構配置図 ( $\frac{1}{800}$ )



付図 4



S B 26, 27, 28, 29 掘立柱建物址（北西より）

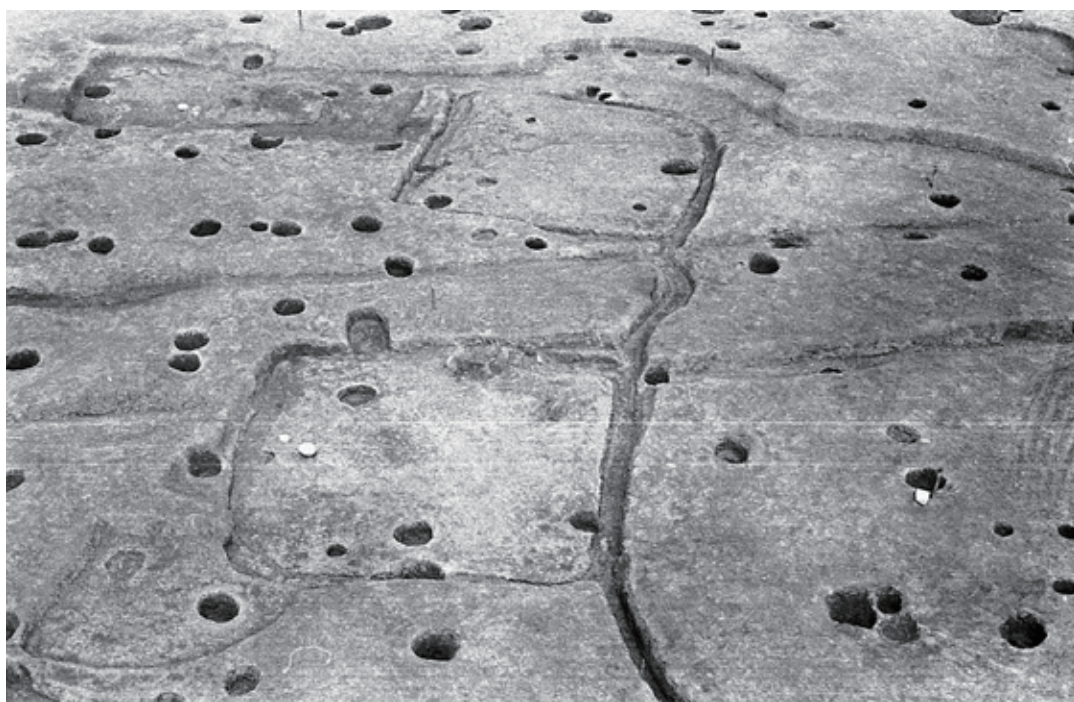


発掘区全景（東より）





発掘区全景（西から）



S B 40, S B 42 竪穴住居址（南より）

